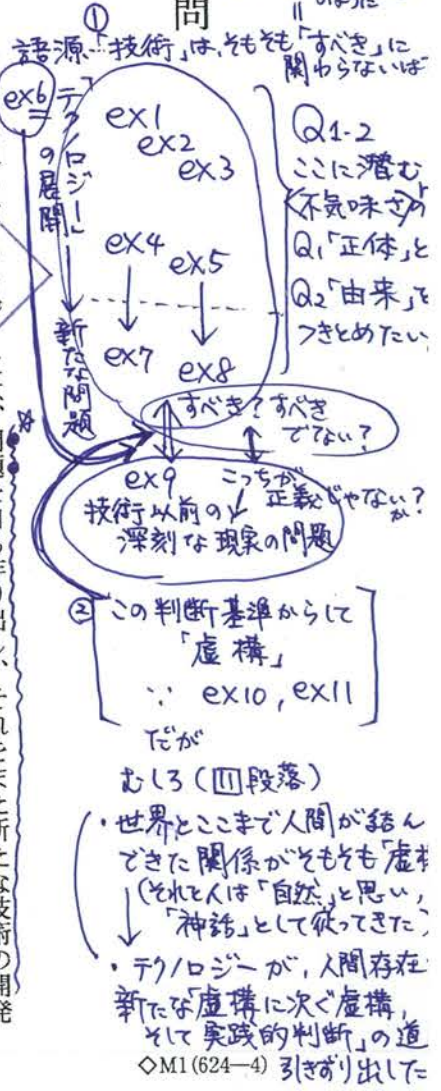


論理の展開の手数が、第一問として史上最も多い。「かしこくしろにする論理の補足を丁寧に積ませる」

2017年度

第 一 問  
 コーパスの「導出」と「教示」の並列  
 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。



与えられた困難を人間の力で解決しようとして営まれるテクノロジーには、問題を自ら作り出し、それをまた新たな技術の開発によって解決しようとするというかたちで自己展開していく傾向が、本質的に宿っているように私には思われる。科学技術によって産み落とされた環境破壊が、それを取り戻すために、新たな技術を要請するといった事例は、およそ枚挙にいとまないし、感染防止のためのワクチンに対してウイルスがタイセイを備えるようになり、新たな開発を強いられるといったことは、毎冬のように耳にする話である。東日本大震災の直後稼働を停止した浜岡原発に対して、中部電力が海拔二二メートルの防波堤を築くことにより、「安全審査」を受けようとしているというニュースに接したときも、同じ思いがリフレインするとともに、こうした展開に

はたして終わりのあるのだろうかという気がした。技術開発の展開が無限に続くとは、たしかにいい切れない。次のステップにならざるを得ないのか、当の専門家自身が予測不可能なのだから、先のことは誰にも見えないというべきだろう。科学技術の展開には人間の営みでありながら、有無をいわせず人間をどこまでも牽引していき、不気味なところがある。いつたいそれはなんであり、世界と人間とのどういった関係に由来するのだろうか。問題提起

医療技術の発展は、たとえば不妊という状態を、技術的克服の課題とみなし、人工受精という技術を開発してきた。その一つ体外受精の場合、受精卵着床の確率を上げるために、排卵誘発剤を用い複数の卵子を採取し受精させたうえで子宮内に戻す、といったことが行なわれてきたが、これによって多胎妊娠の可能性も高くなった。多胎妊娠は、母胎へのフィジカルな影響や出産後の経済的なことなど、さまざまな負担を患者に強いるため、現在は子宮内に戻す受精卵の数を制限するようになってきている。だがこの制限によっても多胎の「リスク」は、自然妊娠の二倍と、なお完全にコントロールできたわけではない、複数の受精卵からの選

Q 1,2 問題提起

究明

不気味さの指摘、補足

ex4

択、また選択されなかった「もの」の「処理」などの問題は、依然として残る。

③ いずれにせよ、こうした問題に関わる是非の判断は、技術そのものによって解決できる次元には属していない。体外受精に比してより身近に起こっている延命措置の問題。たとえば胃瘻などは、マスコミもとりあげ関心を惹くようになったが、もはや自ら食事をとれなくなった老人に対して、胃に穴をあけるまでしなくても、鼻からチューブを通して直接栄養を胃に流し込むことは、かなり普通に行なわれている。このような措置が、ほんのその一部でしかない延命に関する技術の進展は、以前なら死んでいたはずの人間の生命をキユウサイし、多数の療養型医療施設を生み出すに到っている。

④ かつては「老齢の人間の生命をできる限り長く引き伸ばす」ということは、可能性としては現代の医療技術から出てくるが、現実化するべきかどうかとなると、その判断は別なカテゴリーに属する。「できる」ということが、そのまま「すべき」にならないのは、核爆弾の技術をもつことが、その使用を是認することにならないのと一般である。テクネー (techné) である技術は、ドイツ語 Kunst の語源が示す通り、「できること (können)」の世界に属するものであって、「すべきこと (sollen)」とは区別されなければならない。

⑤ テクノロジーは、本質的に「一定の条件が与えられたときに、それに応じた結果が生ずる」という知識の集合体である。付随的な目的を達成すればできるのかについての知識、ハウ・トゥーの知識だといつてよい。それは、結果として出てくるものが望ましいかどうかに関する知識、それを統御する目的に関する知識ではないし、またそれとは無縁でなければならぬ。その限りのところでは、テクノロジーは、ニュートラルな道具だと、いえなくもない。ところが、こうした「すべきこと」から離れているところに、それが単なる道具としてニュートラルなものに留まりえない理由もある。

⑥ テクノロジーは、実行の可能性を示すところまで人間を導くだけで、その行為者としての人間を放棄するのであり、放棄された人間は、かつてはなしえなかつたがゆえに、問われることもなかつた問題に、しかも決断せざるをえない行為者として直面する。

Must = Must Now (Bの干渉)  
 本来 α のあふべき立場 (βとは別)

技術の「テクノロジー」は「事実」  
 ex4 ex7

妊婦の血液検査によって胎児の染色体異常を発見する技術には、そのまま妊娠を続けるべきか、中絶すべきかという判断の是非を決めることはできないが、その技術と出会い行使した妊婦は、いずれかを選び取らざるをえない。いわゆる「新型出生前診断」が

A1 事実!

ex5  
ex8  
ex9

(二〇一三年四月に導入されて以来一年の間に、追加の羊水検査で異常が認められた妊婦の九七%が中絶を選んだという。)

療養型医療施設における胃瘻や経管栄養が前提として生命の可能な限りの延長は、否定しがたいものだし、それを入所条件として掲げる施設があることも、私自身経験して知っている。だが、飢えて死んでいく子供たちが世界に数えきれないほど存在している現実を前にするならば、自ら食事をとることができなくなった老人の生命を、公的資金の投入まで行なつて維持していくことが、社会的正義にかなうかどうか、少なくとも私自身は躊躇なく判断することができない。

ここで判断の是非を問題にしようというのでは、もちろんないし、選択的妊娠中絶の問題(つをとつてみても、最終的な決定基準があるなどとは思えない。むしろ肯定・否定を問わず、いかなる論理をもつてきても、それを基礎づけるものが欠けていること、そういう意味で実践的判断が虚構的なものでしかないことは明らかだと、私は考えている。

補足  
「すべきこと」の是非判断を支える、基礎づける根拠が虚構→虚構

「た」といえば現代の化石燃料の消費を将来世代への責任によって制限しようとする論理は、物語としては理解できるが、現在存在しないものに対する責任など、応答の相手がいないという点で、想像力の産物でしかないといわざるをえない。同じ想像力を別方向に向ければ、そもそも人類の存続などといったことが、この生物種に宿る尊大な欲望でしかなく、「人類が、他の生物種から天然痘や梅毒のように根絶を祈願された」としても、かかる人類殲滅の野望は、人間がこれら己の敵に対してもつている憎悪と、本質的には寸分の違いもないといえるだろう。その他倫理的基準なるものを支えているとされる概念(たとえば「個人の意思や」社会的コンセンサス」などが、その美名にもかかわらず、虚構性をもっていることは、少く考えてみれば明らかである。主体となる「個人」など、確固としたものであるはずがなく、その判断が、時と場合によって、いかに動揺し変化するかは、誰しもが経験することであり、そもそも「個人の意思」を書面で残して「意思表示」とすること自体、かかる「意思なるもの」の可変性をまざまざと表わしている。また「コンセンサス」づくりの「公聴会」なるものが権力関係の追認でしかないことは、私たち自身、いやというほど繰り返し経験していることではなからうか。

やというほど繰り返し経験していることではなからうか。

虚構とは、むしろ人間の行為、いや生全体に不可避的に関わるものである。人間は、虚構とともに生きる、あるいは虚構を紡ぎ出すことによつてこれを支えているといつてもよい。問題は、テクノロジーの発展において、人間が従来それに即して自らを律わったところにある。テクノロジーは、それまでできなかったことを可能にすることによつて、人間が従来それに即して自らを律してきた虚構、しかもその虚構性が気づかれなかった虚構、すなわち神話を無効にさせ、もしくは変質をヨギなくさせた。それは不可能であるがゆえにまったく判断の必要がなかった事態、「自然に任ずることができた状況」を人為の範囲に落とし込み、これと呼応する新たな虚構の産出を強いるようになったのである。そういう意味でテクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう。

補足  
「虚構性」自体は人間存在の根本的要素

虚構のあり方が大きく変わったところがある。テクノロジーは、それまでできなかったことを可能にすることによつて、人間が従来それに即して自らを律してきた虚構、しかもその虚構性が気づかれなかった虚構、すなわち神話を無効にさせ、もしくは変質をヨギなくさせた。それは不可能であるがゆえにまったく判断の必要がなかった事態、「自然に任ずることができた状況」を人為の範囲に落とし込み、これと呼応する新たな虚構の産出を強いるようになったのである。そういう意味でテクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう。

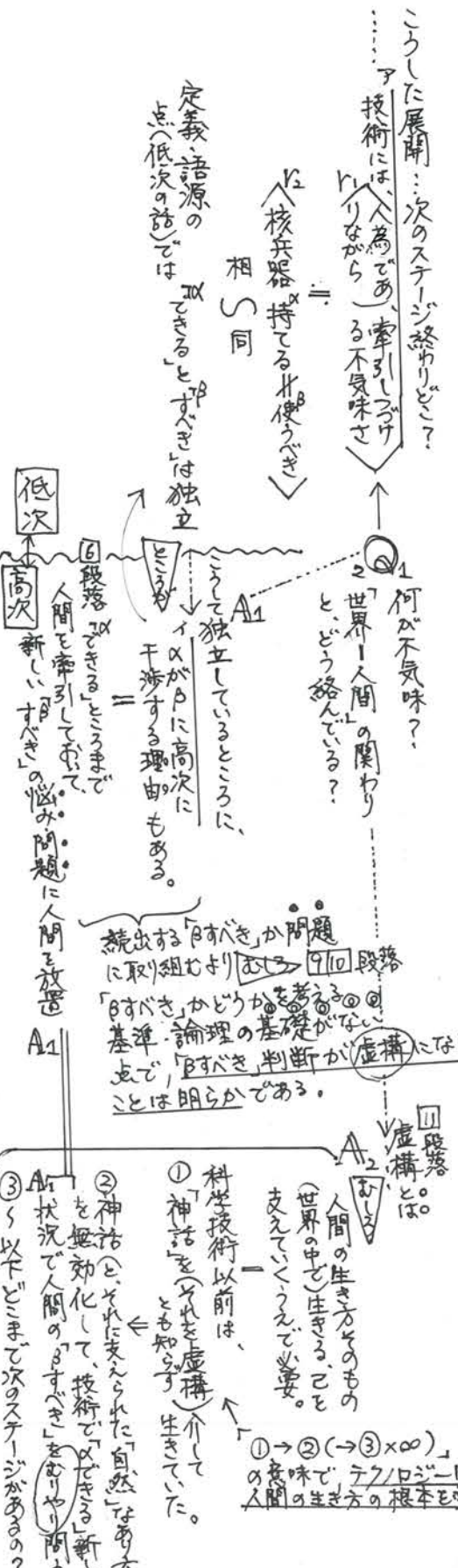
※9=※b  
「神話」のレベルで気づかずに従って自らを律してきた世界のなかの虚構を、技術が人間から奪い、際限のない新たな虚構の連鎖に連れ出した

(伊藤徹「芸術家たちの精神史」 一部省略)

虚構のあり方が大きく変わったところがある。テクノロジーは、それまでできなかったことを可能にすることによつて、人間が従来それに即して自らを律してきた虚構、しかもその虚構性が気づかれなかった虚構、すなわち神話を無効にさせ、もしくは変質をヨギなくさせた。それは不可能であるがゆえにまったく判断の必要がなかった事態、「自然に任ずることができた状況」を人為の範囲に落とし込み、これと呼応する新たな虚構の産出を強いるようになったのである。そういう意味でテクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう。

(一) (四) 同内容の文脈ごとの述べ分け

- (注)
- 排卵誘発剤——卵巣からの排卵を促進する薬。
  - 多胎妊娠——二人以上の子供を同時に妊娠すること。
  - 胃瘻——腹壁を切開して胃内に管を通し、食物や水、薬などを流入させる処置。



テラノロジー  
功罪  
A2  
◇M1(624-7)

We Must Not  
我々主体者の意思が倫理的基準になるならば、そもそもこういう問題はない、悩まないはず。

問1

【河】  
 困難を人間の力で解決するための科学技術が問題を作り出し、  
 その技術的な解決へと人間を駆り立てつつ、技術では扱えない  
 難題(さ)を生み出すこと。

3/6

1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8  
 a 行為を可能にする道具のはずの科学技術が、展開することで統  
 御すべき問題を生み続け、人間の営みを変質させる脅威のこと。

- a 低次の「技術」の定義
- b 高次の干渉の理由
- c 不気味=実際の状況

「不気味さ」  
 【文脈に即して虚構の説明】  
 言及内容・テーマは同じで 文脈が違う 【問題提起の答】  
 テーマは同じで論拠が違う

問2

【河】  
 科学技術は行為の妥当性に囚われなため新たな可能性を次  
 々に切り拓き、その行為に関して倫理の基準を新たに問う必要  
 を生じさせるということ。

(A1としての説明)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8  
 a 実行の是非とは別個のものであるために、技術が可能性を示す  
 たびに人間が決断を迫られて社会に影響が及ぶという事情。

- a 無縁・離れていること  
 || 高次の干渉の理由
- b 導かれるプロセス
- c 「ニュートラル」でない状況  
 の説明

問3

【河】  
 行為に関わる判断を最終的に決定する基準を支えるはずの概念  
 自体が確固たるものでありえず、実際その判断は時代とともに  
 変動しているから。

4/6

1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8  
 a 根拠とする倫理的規準の基礎の概念が危うい虚構である以上、  
 人類による是非の判断が虚構的になることは避けられないから。

問4

【河】  
 かつては不可能であった行為を科学技術が可能にし、そ  
 こに是非を判断すべき領域が広がることで、それまで信  
 じられていた倫理が虚構であることが露呈し、判断基準  
 の虚構性を自覚しつつも、新たな難題に対処するための  
 虚構を産出し続けざるをえなくなったこと。

4/9 + 6/6 = 10/15

(その手段としての外見に反して)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5  
 科学技術は、世界と接する人間を支えてきた「神話」と  
 いう無自覚の虚構から、新たな可能性の展開を示し根拠  
 のない実践的判断を次々に強いていく人工的な虚構のな  
 かに人間の生き方を移行させることによって、果ての見  
 えな社会の変貌をもたらしたということ。

6点  
 技術の示す可能性が  
 判断の是非を強いる  
 +  
 虚構のプロセス3段階  
 X 在3点  
 9/9 + 6/6

- a 是非の判断の基準の内容
- b それ自体の虚構性の指摘
- c 帰結がそれに従うこと  
 の説明